

(様式)

令和6年度 津山市立津山東中学校 学校評価書

校長 河原 一誠



1 自己評価

I 評価結果

項目	成果と課題（達成状況）	評定
「個別最適な学び」「協働的な学び」の充実により、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善を図る。	<ul style="list-style-type: none">・「振り返り」時間の設定や、クロムブックの活用による、個に応じた学び方の選択等により学習者が自己調整しながら主体的に学習に取り組めるよう、授業改善を進めた。・教科会を定期的に開催し、教科指導に関する実践内容の共有や生徒の課題を踏まえた指導方針の確認等を行った。・各授業者が指導の重点を意識した授業実践発表を行い、実践交流に取り組んだ。・11月に英語デジタル教科書活用実証研究事業発表会を開催した。英語科各学年で授業公開し、桃山学院教育大学木村明憲先生から指導助言をいただいた。英語デジタル教科書の活用を、学びを深める手立ての一つと位置づけ、自己調整学習を柱にした授業研究に取り組んだ。・学年末の生徒アンケートでは、「授業を通して、自分の考えを深めたり広めたりすることはできましたか。」という問いには90%が肯定的に回答した。	B
積極的な自治活動等により、自主的・自立的な学校生活の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none">・生徒会が主導する「生活レベルアップ」による学級討議をはじめ、生徒総会や、日常の生徒会各委員会の運営等、生徒が主体性を発揮し、教師の手を借りずに進める自治活動に積極的に取り組んだ。・校則の見直しや新制服の導入について、生徒会を中心とした検討委員会を開催し、検討に取り組んだ。・	B
生徒理解に努め、特別支援教育の推進を図る。	<ul style="list-style-type: none">・SC、SSW等の専門家や医療、児童相談所等関係機関と積極的に連携しながら、個別の生徒理解、生徒支援に取り組んだ。・今年度から通級指導（サテライト教室）が開設され、所属学級と連携し、個別の教育的ニーズを踏まえた支援に取り組んだ。・自立応援室（さくらルーム）の運営により、長期欠席・不登校傾向の生徒を中心とした教育支援の充実を図った。年間で約30名の生徒が利用した。	B

郷土への理解を深め、地域と共に学び、活動できる力を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> 各学年のつやま郷土学への取組は、地域の良さや課題について理解を深める機会となった。 定期的な情報交換等、各公民館との連携を継続した。各公民館の企画により、地域でのボランティア活動等に参加する中学生は徐々に増えている。また、こうした活動の状況はHP、学校だより等で発信した。 学年末の生徒アンケートでは、「地域とのつながりを感じる」という問いへの肯定的回答は55%だった。 	B
社会に目を向け、将来の夢に向かって自ら進んで進路を切り開く力を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な学習の時間を軸にした教科横断的な探究学習「つやま郷土学」に各学年で取り組んだ。郷土への愛着を深めるとともに、郷土の未来や自らの将来の姿を考えるきっかけとなった。 <ul style="list-style-type: none"> 1年生：校外学習、地域の課題について考える学習及び発表会の開催 2年生：職場体験学習と探究学習の成果も含めた発表会の開催 1年生は、 3年生：修学旅行先の街と津山市の比較を踏まえた探究学習と成果発表会の開催 	B

(A：目標を上回っている B：ほぼ目標どおり C：目標を下回っている)

II 分析・改善方策

<ul style="list-style-type: none"> 学校教育目標、研究主題の意義を職員間で十分に共有し、授業や自治活動等、学校生活を通して育てたい生徒を意識した教育活動に引き続き取り組む。 ICT 機器を効果的に活用し、生徒自身が主体的に取り組む授業の在り方について更に研究を深めていく。また、組織的な取組を強化するため、定例の教科会や研究授業を開催するなど、研究体制を継続・発展させていく。 生徒の自治活動等においても、生徒の主体性を引き出す指導に取り組み、自己肯定感・自己有用感の更なる醸成を図る。 個別の生徒理解に基づく支援を充実させるために、教員の専門性の向上を図るとともに専門家や関係機関と積極的に連携していく。 コミュニティ・スクールを活かした教育活動の展開に更に取り組んでいく。生徒の地域行事への参加や、保護者、地域、学校が関わり合う機会を設定するなど、地域との連携を一層推進する。 HP には多くのアクセス数があり、学校だより等も含め、引き続き学校からの積極的な情報発信に努める。

2 学校関係者評価委員会

学校運営協議会（20名）

3 学校関係者評価

＜アンケート項目＞	＜肯定的回答＞
・地域が学校に関わると学校の教育が充実する。	94%
・登下校の生徒を見守る活動（あいさつ運動）に関わった。	71%
・生徒と地域の方（小学生を含む）が交流する活動が行われている。	88%
・学校は、学校の活動や様子を学校だよりやHPなどで伝えている。	82%
・学校は、地域の意見やニーズを教育活動に反映する努力をしている。	94%
・学校の環境は、整備されている。	76%
・学校の教職員は親しみやすい。	88%
・生徒は、よくあいさつする。	94%
・生徒は、交通マナーや社会のルールを守っている。	59%
・生徒は、地域の活動に積極的に参加している。	63%
＜主な意見＞	
・多くの生徒が部活動等で表彰されるなど活躍し、前向きに頑張っている。	
・校門でのあいさつ運動で、生徒たちはよくあいさつできる。	
・生徒たちが地域の活動に参加するようになってきた。	
・授業に参加できていない生徒をどうするか、支援の手立てを考える必要がある。	
・ヘルメットの着用等、登下校の様子が心配である。学校では指導されていると感じるが、地域でも声かけをすべきである。	
・懇談会等、地域、保護者、教職員間のコミュニケーションの機会を改善する。	
・学校運営協議会の回数を増やして学校への理解を深めるなど、更に連携を図っていく。	
・学校改善に地域の力を更に利用していくべきである。	

4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

学校教育目標（「地域とともに創る、笑顔があり、元気な学校」～他者とのつながりを大切にし、自ら学び、行動する、自立した生徒の育成～）、研究主題（「教える」「させる」から「委ねる」「支える」へ転換する指導のあり方）を継続・発展させながら、以下のことに重点的に取り組む。

○指導の重点

- ・「個別最適な学び」「協働的な学び」の充実により、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善を図る。
- ・積極的な自治活動等により、自主的・自立的な学校生活の充実を図る。
- ・生徒理解に努め、特別支援教育の推進を図る。
- ・郷土への理解を深め、地域と共に学び、活動できる力を育てる。
- ・社会に目を向け、将来の夢に向かって自ら進んで進路を切り開く力を育てる。

○教育DXの推進

- ・データやデジタル技術の積極的な活用により、効率的かつ効果的な学校運営を目指す。

○地域、保護者との連携

- ・積極的な情報発信、CSを活かした教育活動の推進等、学校、保護者、地域の更なる連携強化に取り組む。